

定時制高校生における自己概念及びストレス対処過程の特徴と 効果的な指導の在り方

専門研修員 吉田 宏 (川崎市立高津高等学校)

I. 主題設定の理由

平成 17 年度高等学校定時制課程の中退率¹⁾は 13.9%であり、学年別では 1 年生で 26.7%にも達している。定時制課程においては、1 年生の段階で 4 人に 1 人以上の生徒が中途退学していることになる。また、本市の調査²⁾によれば、平成 17 年度の 1 年生では 34.5%に達しており、3 人に 1 人以上の退学率となっている。現在、定時制課程に入学してくる生徒の状況は、過去のものとは大きな変化を見せている。いわゆる勤労学生は少なくなり、中学校時代不登校であった生徒や中学校生活に適應できなかった生徒、高等学校の全日制課程への受験に失敗した生徒、あるいは全日制課程を中途退学した生徒が多くを占めるようになってきている。神奈川県調査³⁾によれば、平成 19 年度定時制入学生の 26.5%が不登校経験者であり、12.8%が過年度生であった。平成 16 年度の文部科学省の調査⁴⁾においても、高等学校における不登校生徒のうち、中学校時長期欠席の経験がある生徒は、高等学校で把握しているものだけでも 21.1%となり、過去の影響が高校生活に大きく表れることがわかる。

このような中途退学生徒に対し、各地方自治体教育委員会は新しいタイプの高等学校として、フレキシブルスクールや三部制の高校などを新設、あるいは通信制高校の充実などが図られ一定の成果を挙げている。本市においても「市立高等学校改革推進計画」の中で定時制課程の改革を示し、二部制定時制の導入などを計画している。このように、新しい制度や柔軟性のある仕組みを整備していくことは重要である。しかし、中途退学の理由の中で最も多いものは「学校生活や学業への不適應」(38.6%)であることや、定時制高校の教師が入学時の多くの生徒に対して感じる「自信のなさ」あるいは「自尊感情の低さ」などの特徴を考えると、制度や仕組みの整備以上に個々の生徒への適切な指導の必要性を感じる。したがって、本研究においては、定時制高校の教師が一部の生徒に対し「自信のなさ」あるいは「自尊感情の低さ」としてとらえている定時制高校生の特徴を、自己概念やストレス対処過程の特徴と考え、全日制生徒と比較し分析するとともに、そこで得られた特徴から定時制高校生に特に必要とされる効果的な指導法について検討する。

II. 研究の内容

1. 研究の意義

(1) 自己概念研究の歴史

「自分に対する自信のなさ」「自尊感情の低さ」などは、「自分が自分をどのように見るか」という自己概念の問題である。自己概念については、Rogers (1951)⁵⁾が「現象的自己 (Phenomenal self)」を提唱してから、数多くの研究がなされてきた。学校生活や学校不適應に関して、比較的数多く研究

¹⁾ 生徒指導上の諸問題の現状について (2006 年 文部科学省)

²⁾ 年刊 教育統計調査資料 (2007 年 川崎市教育委員会)

³⁾ 公立中学生志願動向等調査検討会議報告 (2007 年 神奈川県公立中学生志願動向等調査検討会議)

⁴⁾ 生徒指導上の諸問題の現状について (2005 年 文部科学省)

⁵⁾ Rogers, C.R. 1951 Client-centered therapy Its current practices, implications and theory HoughtonBoston (ロジャース全集 3 1966 友田不二男編訳 岩崎学術出版)

されているのが「不登校」との関連を検討するものである。不登校児童生徒の自己概念についての注目すべき先行研究には、小林・霜村(2001)の研究がある。小林・霜村(2001)⁶⁾は、サポート校に登校する元不登校生徒 588 人に対し、過去(中学の時)の自分の自己概念と現在の自分を比較し、自己概念の変化と現在の状態像の関係などを考察している。その中で、不登校状態に置かれたときに、児童生徒の自己概念が悪くなるのが指摘されており、非常に意義深い内容となっている。

本研究は、定時制高校生の自己概念の調査を行うが、定時制高校生に多くの元不登校経験者が含まれることや、高校での不登校は中途退学へ至ることなどを考えると、先行研究で示された知見は重要であり、それに基づいた定時制高校生への調査そして検討は、たいへん有意義であると考えられる。

(2) ストレス研究の歴史

一方、近年の心理的ストレスに関する研究の多くは、Lazarus&Folkman(1984)⁷⁾の提出したストレスモデルに基づいて行われている。このモデルは、経験した出来事に対する認知的評価やストレスコーピングという個人の認知的行動的側面に焦点をあてたものであり、ストレスイベントの個人的な意味合いが重視される。ストレスに関する研究は数多いが、ストレスと学校生活に関する研究も、様々な面から盛んに行われている。

本研究においては、自己概念と同時にストレス対処過程についての調査を行うが、定時制高校生のストレス対処過程の特徴を検討することは、定時制生徒に特に必要な指導の観点を明らかにすると同時に、中途退学を減らすための方向を示すことになると考えられる。

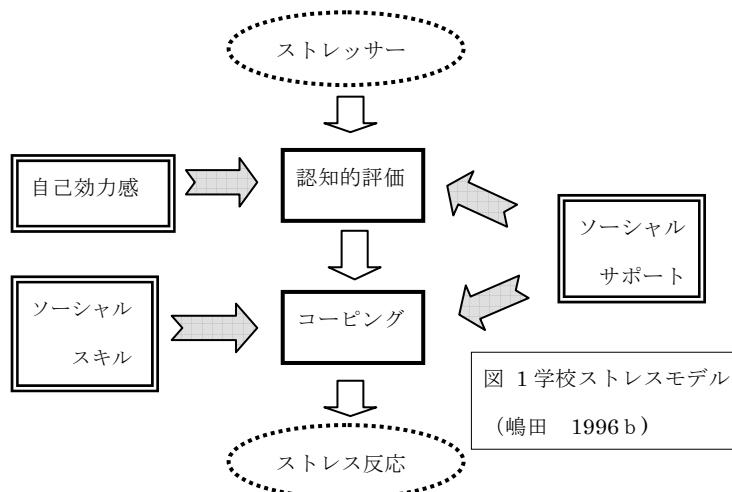


図 1 学校ストレスモデル (嶋田 1996b)

2、研究の内容

(1) 目的

- ・定時制高校生の自己概念(自己効力感)の特徴を調査する。
- ・定時制高校生のストレス対処(ソーシャルサポート・ソーシャルスキル)の特徴を調査する。
- ・自己概念及びストレス対処過程の特徴から効果的な指導法を検討する。
- ・高校生活での成長を自己概念やストレス対処過程の観点から考察する。

(2) 方法

自己概念については、それを悪化させることで、積極的な行動が表出しにくくなるであろうと判断できる自己効力感についての調査を行う。また実際の学校生活や社会的適応に直接関係すると思われるストレス対処については、外部の変数と考えられるソーシャルスキル、ソーシャルサポートの過程について質問紙調査をする。

⁶⁾ 小林正幸・霜村 2001 不登校の自己概念の変容に関する研究 東京学芸大学紀要 1 部門 52, 229-287

⁷⁾ Lazarus, R.S & Folkman, S. 1984 Stress Appraisal and Coping. New York: Springer (本明寛 春木豊 織田正美訳 1991 ストレスの心理学 実務教育出版)

(3) 対象

調査対象は、川崎市内の定時制高校1年生4クラスに在籍する生徒（男38名、女48名）とした。また、全日制生徒は同じ高校に通学する1年生3クラスに在籍する生徒（男46名、女67名）とした。定時制高校は川崎市の中部に位置し、市内では最も大きな定時制高校である。生徒は、川崎市中部及び北部、また横浜市からも登校している。全日制生徒については、定時制生徒と居住地域が似ている点等、比較対象として適切であると判断した。

Table 1 対象の課程・男女別人数（第1回調査）

	定時制	全日制
男子	38名	46名
女子	48名	67名
合計	86名	113名

(4) 調査方法・調査項目の構成

①自己効力感尺度

自己に対する概念には、様々な理論や考え方があがるが、Bandura(1977)⁸⁾の提唱した自己効力感は、人が実際に行動を起こそうとするときの大きな推進力

として考えることができ、本研究には最も適したものだと考える。本研究では、第1回調査では嶋田(1996a)⁹⁾の作成した中学生用自己効力感尺度のうち、学校教育にふさわしくないとされる表現の項目を除いたものを用いた。また、第2回ではより詳しく調査するため、成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田(1995)¹⁰⁾によって作成された特性的自己効力感尺度を用いた。

②中学生用ソーシャルサポート測定尺度

嶋田(1996a)によって作成された中学生用ソーシャルサポート尺度を用いる。学校教育によりふさわしい表現にするため、父・母・兄弟の各項目を家族としてまとめ実施した。

③中学生用社会的スキル測定尺度（第1回調査のみ）

嶋田(1996a)の作成した中学生用社会的スキル測定尺度を、項目を整理し20項目として用いた。

(5) 手続き

第1回調査として、入学間もない2007年6月に、自己概念(自己効力感)とストレス対処過程(ソーシャルスキル、ソーシャルサポート)の各質問紙を、定時制課程の1年4クラス、全日制課程の1年3クラスにおいて各担任が学級活動の時間を利用し記入させた。

第2回調査は、学校生活での成長を調査するため、年間でもっとも大きな行事である体育祭(9月)及び文化祭(10月)が行われた後の2007年11月を調査日時として選び、同様の調査を行った。なお、第2回調査では、第1回調査で有意差が見られなかったソーシャルスキルの調査は行わなかった。

(6) データの分析方法

①第1回調査

定時制生徒と全日制生徒との全体的な比較を行うため、自己概念(自己効力感)とストレス対処(ソーシャルスキル、ソーシャルサポート)の各質問紙を集計し、項目ごとにt検定を行い有意差を検討した。さらに、男女別の検定も行った。また、定時制女子生徒については自己効力感の平均点を基準とし、その上位グループと下位グループとの間でt検定を行い、ソーシャルスキル及びソーシャルサポートの各項目と自己効力感との相関を分析した。

⁸⁾ Bandura, A. 1997 Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavior change, *psychological Review*, 84 191-215

⁹⁾ 嶋田洋徳 1996a 児童生徒の心理的ストレスと学校不適応に関する研究 早稲田大学大学院人間科学研究科平成7年度博士論文

¹⁰⁾ 成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子 1995 特性的自己効力感尺度の検討 教育心理学研究 43、306-314

②第2回調査

第1回調査と同様に、定時制生徒と全日制生徒との全体及び男女別の t 検定を行い、有意差を検討した。さらに、男女別の検定も行った。

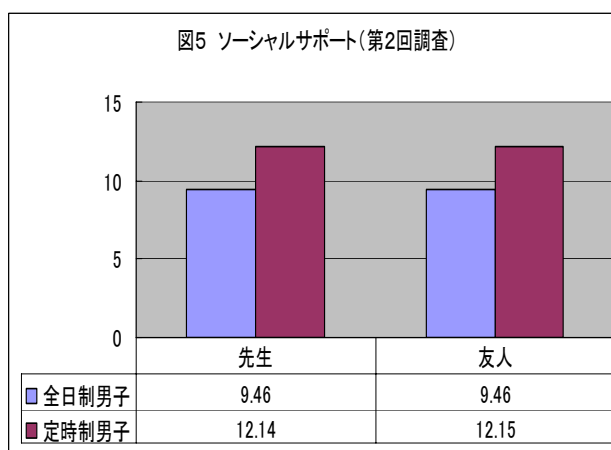
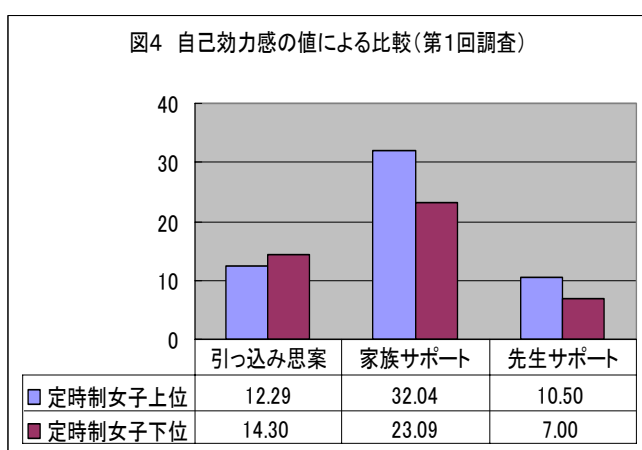
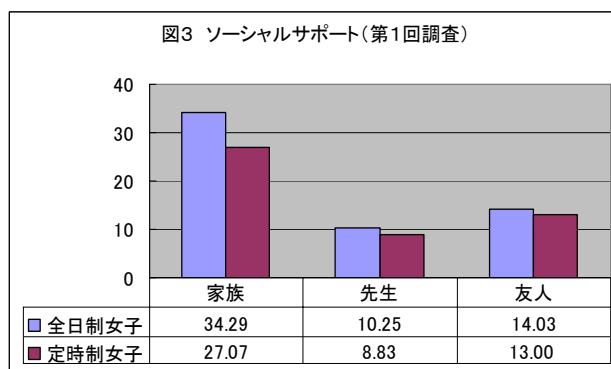
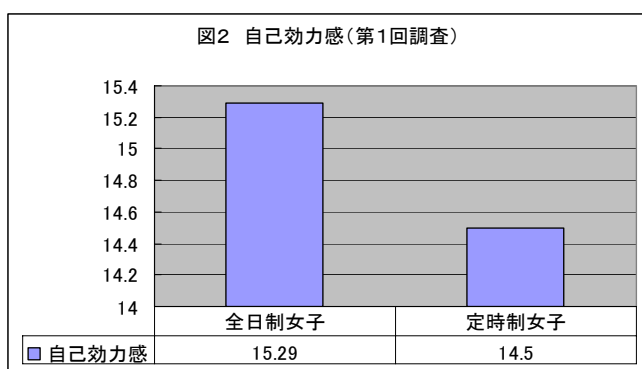
(7) 結果

①第1回調査 (2007年6月)

- ・自己効力感については、全日制女子と定時制女子の間に有意差 (図2) が見られた。
- ・ソーシャルサポートについては、生徒全体及び女子の間に有意差 (図3) が見られた。
- ・ソーシャルスキルについては、生徒全体・女子について有意差は見られなかったが、男子の向社会行動で有意差が見られた。
(* 上記3項目の有意差は全日制が高得点)
- ・定時制女子について、自己効力感上位グループと下位グループとの間に、ソーシャルサポートの家族・先生の項目とソーシャルスキルの引っ込み思案行動に有意差 (図4) が見られた。

②第2回調査 (2007年11月)

- ・自己効力感については、生徒全体及び男女別それぞれに有意差は見られなかった。
- ・ソーシャルサポートについては、生徒全体で先生が、男子において先生と友人の各項目で定時制生徒が高得点として、有意差 (図5) が示された。また、女子については有意差は見られなかった。



Ⅲ. 研究のまとめ

(1) 定時制高校生における自己概念及びストレス対処過程の特徴 (第1回調査から)

①定時制高校の新生に見られる特徴

定時制高校の生徒の多くは、様々な事情を抱えながら入学してくる。したがって、挫折の経験

などから、不安や恐れを抱える生徒も数多くいることは、容易に想像できる。定時制高校の教師は、日頃から一部の生徒に対し特徴として「自信のなさ」「自尊感情の低さ」などを感じていた。本研究においては、今までは直感的に感じていた定時制生徒の特徴を、ストレス対処の観点から調査を行った。調査結果から、男子生徒には大きな特徴は見られなかったものの、女子の生徒に全日制女子と有意差が見られた。女子生徒は、定時制高校入学前の様々な経験により、全日制女子生徒と比較し自己効力感が低いこと、また、先生や友人からサポートが得られると考える生徒が少ないことが示された。

自己効力感とは、ある結果を生み出すために必要な行動を、どの程度うまくできるかの予期(期待)である。つまり、自己効力感が低いということは、何か行動を起こすとき成功することが予測できず、逆に失敗を予測し行動をしり込みしてしまう、ということになる。このことは、教師が生徒に対し「自信のなさ」として感じている部分と一致している。

また、ソーシャルサポートについては、岡安・嶋田・坂野(1992)¹¹⁾によれば、学校ストレスサーを感じていたとしても周囲の人に相談したり慰められたりするソーシャルサポートにより、ストレス反応は大きく軽減されることが指摘されている。特に、女子生徒は男子生徒に比べ、より多くのサポートを期待することが知られている。今回の調査では、先生や友人からのサポートの期待が低いことがわかった。入学前の様々な経験から、サポートが期待できないと思い込み、ストレス対処の力を低下させていることがわかる。

さらに、自己効力感と他の項目との相関関係を分析した結果から、定時制女子生徒において自己効力感とソーシャルサポートとの相関も明らかになった。つまり、ソーシャルサポートを多く期待できる生徒は自己効力感も高く、逆にサポートの期待できない生徒は自己効力感も低くなっている、と考えることができる。このことは、ソーシャルサポートを多く得ることができれば、自己効力感も高まる可能性を示しており、指導の方向性を得る手がかりともなる。

②効果的な指導の在り方

今回の調査においては、男子生徒より女子生徒に自己概念やストレス対処力の低下が見られた。したがって、女子生徒に対しより効果的なきめ細やかな指導が必要であることが明らかになった。

自己効力感をあげることに對して Bandura(1977)は、次の4点で個人自らが作り出していくものであるとしている。①自分で実際におこなってみること(遂行行動の達成)②他者の行為を観察すること(代理的経験)③自己教示や他者からの説得的な暗示(言語的説得)④生理的な反応を体験してみる(情動的喚起)である。学校生活においては、①成功体験を経験させること、②仲間の成功体験を見ること、③先生や友人に励ましてもらうこと、④成功した喜びや充実感を味わうこと、となるであろう。嶋田(1996b)¹²⁾によれば、実際に不登校に陥ってしまった中学生に対し、自己効力感をあげる上記の①や②や③の介入を行った結果、不適応行動の改善とストレス反応の減少を報告している。このように、授業や学校行事の様々な場面で、生徒自らが参加し成功体験を数多く経験させることが重要である。

ソーシャルサポートの主なサポート源は、家族・教師・友人となる。これらのサポート源から「サポートを受けることができる」と感じていることが、ストレス対処にとって重要となる。学

¹¹⁾ 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 1992 中学校のソーシャルサポートと学校ストレスサー評価との関係 日本心理学会第5回大会発表論文集 60-61

¹²⁾ 嶋田洋徳 1996b 中学生におけるセルフ・エフィカシーの心理的ストレス軽減効果 ヒューマンサイエンスリサーチ 5、55-68

校生活では、家族のサポートについて関与することは難しいが、①教師が学校生活の様々な場面で細やかに声をかけ、教師自身がサポート源として生徒に認知されることや、②生徒同士の間関係作りを、教師が意図的に指導していくことにより友人からのサポートを強化していく、などが考えられる。また、本研究ではソーシャルサポートを多く認知することと自己効力感をあげることが相関しており、ソーシャルサポートへの取組が同時に自己効力感の改善にもつながる可能性を示している。

（２）学校生活での成長（第２回調査から）

第２回目の調査は、夏休み・体育祭・文化祭と大きな行事を経験した後の１１月に調査を行った。第１回調査で示された有意差は見られなかった。自己効力感については、男女とも有意差が見られず、全日制生徒とほぼ同様の結果となった。また、ソーシャルサポートについても、第１回調査で大きな有意差が見られた女子に差が見られなくなっており、男子においては全日制生徒より高得点を示した。これは、定時制高校の新入生が学校生活や行事を経験することによって大きく成長し、ストレスへの対処力を高めている姿を示している。様々な学校生活の経験や成功体験が、生徒に自信を与え自己効力感を高めたのであろう。また、ソーシャルサポートの得点の上昇は、学校生活の中に豊かな人間関係が築かれ始めたことを示している。特に、先生からのサポート得点が大きく上昇しており、教師からの細やかな指導が効果を現していると思われる。

（３）今後の課題

本研究において、入学間もない定時制高校生が学校生活を経験することで、ソーシャルサポートを獲得し自己効力感を高めていく様子が示された。しかし、今後の研究課題としていくつかの課題が残った。

- ・学校行事や学校生活の中のどのような経験や体験が、自己概念及びストレス対処のどの部分に影響を与えたのか示されていない。
- ・定時制高校２年次以降の退学率も全日制高校より高い調査結果があり、今回示された生徒の成長が今後も維持されていくのかという確認はされていない。
- ・１１月の調査時点で、すでに退学している生徒や欠席の多い生徒も多く（約２０名）、それら高校生活のスタート直後から不適応を起こしている生徒への調査が本研究には加えられていない。

これらの残された課題はたいへん重要であり、さらに研究を進めることでより具体的でより効果的な指導法の提案につなげていきたい。

最後に、研究を進めるに当たり適切なお助言をいただいた先生方、研究にご支援、ご助言をくださいました校長先生をはじめ学校教職員の皆様に、心より感謝し厚くお礼申し上げます。

【参考文献】

- | | | | |
|-------------|--------------------|-------|-------|
| アルバート・バンデュラ | 『激動社会の中の自己効力』 | 金子書房 | 1997年 |
| 坂野雄二 前田基成 | 『セルフ・エフィカシーの臨床心理学』 | 北大路書房 | 2002年 |

【指導助言者】

川崎市総合教育センター教育相談センター指導主事

堀米 達也